

源氏物語

鈴虫

紫式部

青空文庫

すずむしは釈迦牟尼仏のおん弟子の君

のためにと秋を淨むる

(晶子)

夏の蓮はすの花の盛りに、でき上がった入道の姫宮の御持仏の供養が催もよほされることになった。御念誦堂ごねんじゅうどうのいつさいの装飾と備え付けの道具は六条院のお志で寄進されてあつた。柱にかける幡ぼんなども特別にお選びになつた支那錦しなにしきで作られてあつた。紫夫人の手もとで調製された花机かきの被おほいは鹿かの子染こめを用いたものであるが、色も図柄も雅味に富んでいた。帳台の四方の帷とばりを皆上げて、後ろのほうに法華經ほけきょうの曼陀羅まんだらを掛け、銀の華瓶かへいに高く立華りっかをあざや

かに挿さして供えてあつた。仏前の名みようこう香かうには支那の百歩ひやくぶ香かうが
たかれてある。阿弥陀あみだ仏と脇士わきしの菩薩ぼさつが皆びやくだん白檀びやくだんで精巧な彫り
物に現わされておいでになつた。闍伽あかの具はことに小さく作られ
てあつて、白はくぎよく玉ぎよくと青せいぎよく玉ぎよくで蓮の花の形にした幾つかの小香こ
炉うろには蜂蜜はちみつの甘い香を退のけた荷葉香かようかうが燻くべられてある。経卷
は六道を行く亡者もうじやのために六部お書かせになつたのである。宮
の持経は六条院がお手ずからお書きになつたものである。これを
御みほとけ仏への結縁としてせめて愛する者二人が永久に導かれたい希
望が御願がんもん文に述べられてあつた。朝夕に読どく誦じゆされる阿弥陀經
は支那の紙ではもろくていかがかと思おぼしめ召され、紙屋川かみやの人をお
呼び寄せになり特にお漉すかせになつた紙へ、この春ごろから熱心

に書いておいでになったこの経巻は、片端を遠く見てさえ目がくらむ気のされるものであつた。罫けいに引いた黄金の筋よりも墨の跡がはるかに輝いていた。軸、表紙、箱に用いられた好みの優雅さはことさらにいうまでもない。この巻き物は特に沈しんの木の華足げそくの机つくえに置いて、仏像を安置した帳台の中に飾つてあつた。堂の準備ができて講師が座に着き行ぎようこう香かうをする若い殿上人などが皆そろつた時に、院もその仏間のほうへおいでになろうとして、尼宮の西の庇ひさしのお座敷へまずはいって御覧になると、狭い気のするこの仮のお居間の中に、暑いほどにも着飾つた女房が五、六十人集まつていた。童女などは北側の室へやの外の縁にまで出ているのである。火入れがたくさん出されてあつて、薫たきもの香かうをけむいほど女房たち

が煽^{あお}ぎ散らしているそばへ院はお寄りになつて、

「空^{そら}だきというものは、どこで焚^たいているかわからないほうが感じのいいものだよ。富士の山頂よりもつとひどく煙の立つているのなどはよろしくない。説教の間は物音をさせずに静かに細かく話を聞かなければならないものだから、無遠慮に衣^{きぬ}擦れや起^たち居の音はなるべくたてぬようにするがいい」

などと、例の軽率な若い女房などをお教えになつた。宮は人^{ひと}氣に押されておしまいになり、小さいお美しい姿をうつ伏せにしておいでになる。

「若君をここへ置かずに、どちらか遠い部^へ屋^やへ抱いて行くがよい」とまた院は女房へ注意をあそばされた。北側の座敷との間も今

日は襖からかみ子こがはずされて御簾仕切りみすにしてあつたが、そちらの室へやへ女房たちを皆お入れになつて、院は尼宮に今日の儀式についての心得をお教えになるのであつたが、その方を可憐かれんにばかりお思われになつた。昔の鴛鴦えんおうの夢の跡の仏の御座みざになつている帳台が御簾越しにながめられるのも院を物悲しくおさせすることであつた。

「こんな儀式をあなたのためにさせる日があるうなどとは予想もしなかつたことですよ。これはこれとして来世の蓮はすの花の上では睦むつまじく暮らそうと期きしていただくさい」

と言つて院はお泣きになつた。

蓮葉はちすばを同じうてなと契りおきて露の分かるる今日けふぞ悲しき

硯すずりに筆をぬらして、香染めの宮の扇へお書きになった。宮が横

へ、

隔てなく蓮はちすの宿をちぎりても君が心やすまじとすらん

こうお書きになると、

「そんなに私が信用していただけないのだろうか」

笑いながら院は言っておいでになるのであるが身にしむものがある御様子であつた。

例のことであるが親王がたも多く参会された。六条院の夫人たちから仏前へささげられた物の数も多かった。七僧の法服とか、この法事についての重だった布施は皆紫夫人が調製させたものである。あやし綾地の法服で、袈裟けさの縫い目までが並み並みの物でないことを言つて当時の僧がほめたそうである。こんなこともむずかしいものらしい。

講師が宮の御遁世とんせいを讃美さんびして、この世におけるすぐれた栄華をなお盛りの日にお捨てになり、永久の縁を仏にお結びになったということ、豊かな学才のある僧が美辞麗句をもつて言い続けるのに感動して萎しおたれる人が多かった。今日のはただ御念誦ごねんじゆどう堂みでら開きとしてお催しになった法会ほうえであつたが、宮中からも御寺の法

皇からもお使いがあつて、御誦經の布施などが下されてにわかには派手なものになった。初めの設けは簡単にしたように院は思召おぼしめしても、それは決して並み並みの物でなかつた上、宮廷の御寄進が添つたので、出席した僧たちは、置き所もない布施を得て寺へ歸つた。

御出家をあそばされた今になつて宮を院がごたいせつにあそばすことは非常で、無限の御愛情が運ばれていると見えた。御寺のみかど帝は宮へ御分配になつた邸宅へ今はもうお移りになるほうが世間体もよいとお勧めになるのであつたが、六条院は、

「遠くなつては始終お目にかかることもできないので困ります。毎日お逢いしてお話ができたり、あなたの用を聞いたりすること

ができなくなつては、私の期していたことが皆画餅がべいになつてしまふ。そういつても私に残された命はもう何ほどでもないのです。うが、生きている間はせめてその志だけでも尽くさせてください」

とお言いになつて賛成をあそばさないのである。院はまたそのほうの邸宅もきれいに修繕させてお置きになつて、宮が官から給されておいでになる収入や、御私有の莊園や牧から上がつて来る物の中でも、貯蔵しておく価値のある物は皆その三条の宮の倉庫くらへ納めさせてお置きになつた。新しい倉庫の建て増しまでおさへになつて、それへは法皇がこの宮へ無数に御分配になつた貴重品の今まで六条院にあつたのを移してお蔵しまわせになつた。これは永久に宮の御家を経済的に保証する価値ある財産というべきもので

ある。そして六条院における宮の御生活とおおぜいの女房、男女の召使に要する費用は院の御負担とお決めになったのである。

秋になって院は尼宮のお住居すまいの西の渡わた殿どのの前の中の堀へいから東

の庭を草原にお作らせになった。闕伽あかだな棚などをそのほうへお作ら

せになったのが優美に見える。宮の御出家のお供をして乳母めのとその

ほかの老いた女たちは必然的に尼になったが、若盛りの人でも、

他日動揺する恐れのない、信念の堅そうな人たちだけを御弟子に

されることになり、われもわれもと希望する者の多いのを、院が

お聞きになって、

「群衆心理で今はその気になっているでしょうが、それをお許しになってはいけませんよ。不純な者が少しでも混じっていては他

の者の迷惑になりますよ」

と御忠告になり、全部の中から十幾人だけが尼姿で侍することになった。今度の草原に院は虫をお放ちになつて、夕風が少し涼しくなるころに宮の所へおいでになり、虫の音を愛しておいでになるふうでしきりに宮を誘惑しようとしておいでになった。今さらそうした行ないはあるまじいことであると、宮はただ恐ろしがつておいでになった。人目には以前と変わらぬようにあそばしながら、あの秘密をお知りになつてからは、汚れたものとして嫌悪けんおをお続けになつた自分の肉体を悲しむ心が出家のおもな動機になり、尼になつた時からはいっさいの愛欲を忘れることができて、静かな平和な心を楽しんでいる自分に、またこうしたことを求め

られるのは苦しいことであると宮は思いになり、六条院でない所へ住み移りたくおなりになるのであつたが、これをはきはきと言つておしまいになることもできぬ弱い御性質であつた。

十五夜の月がまだ上がらない夕方に、宮が仏間の縁に近い所でねんじゆ念誦をしておいでになると、外では若い尼たち二、三人が花をお供えする用意をしていて、あか闕伽の器具を扱う音と水の音とをたてていた。青春の夢とこれとはあまりに離れ過ぎたことと見えて哀れな時に、院がおいでになった。

「むやみに虫が鳴きますね」

こう言いながら座敷へおはいりになった院は御自身でも微音にあみだ阿弥陀のだいじゆ大誦をお唱えになるのがほのぼのと尊く外へ洩もれた。

院のお言葉のように、多くの虫が鳴きたてているのであつたが、その時に新しく鳴き出した鈴虫の声がことにはなやかに聞かれた。「秋鳴く虫には皆それぞれ別なよさがあつても、その中で松虫が最もすぐれているとお言いになつて、ちゅうぐう中宮が遠くの野原へまで捜しにおやりになつてお放ちになりましたが、それだけの効果はないですよ。なぜと言え、持つて来ても長くは野にいた調子には鳴いていないのですからね。名は松虫だが命の短い虫なのでしよう。人が聞かない奥山とか、遠い野の松原とかいう所では思うぞんぶんに鳴いていて、人の庭ではよく鳴かない意地悪なところのある虫だとも言えますね。鈴虫はそんなことがなくて愛あいさう嬌いきようのある虫だからかわいく思われますよ」

などと院はお言いになるのを聞いておいでになった宮が、

大かたの秋をば憂^うしと知りにしを振り捨てがたき鈴虫の声

と低い声でお言いになった。非常に艶^{えん}で若々しくお品がよい。

「何ですって、あなたに恨ませるようなことはなかったはずだ」と院はお言いになり、

心もて草の宿りを厭^{いと}へどもなほ鈴虫の声ぞふりせぬ

ともおささやきになった。琴をお出させになって珍しく院はお

弾^ひきになった。宮は数珠^{じゆず}を繰るのも忘れて院の琴の音を熱心に聞き入っておいでになる。月が上がってきてはなやかな光に満ちた空も人の心にはしみじみと秋を覚えさせた。院は移り変わることのすみやかな人生を寂しく思い続けておいでになって平生よりも深く身にしむ音をかき立てておいでになった。毎年の例のように今夜は音楽の遊びがあるであろうとお思いになって、
兵部卿^{ひようぶきよう}の宮が来訪された。左大將も若い音楽に興味を持つ人々を伴って参院したのであるが、こちらの御殿で琴の音のするのを聞いて出て来た。

「退屈でね、わざとする会合というほどのことでなしに、しばらく聞かれなかった音楽を人が来て聞かせてくれないだろうかと思

つて、誘い出すことが可能かどうかと、まず一人で始めていたのを、よく聞きつけて来てもらえたね」

と院はお言いになった。宮のお席もこちらへ作らせてお招じになった。今夜は御所で月見の宴のあるはずであつたのが、中止になつて寂しがっていた人たちが、六条院へだれかれが集まつていと聞いて、あとからも来るのであつた。虫の声の批評をしたあとで、音楽の合奏があつておもしろい夜になった。

「月をながめる夜というものにいつでも寂しくないことはないものだが、この中秋の月に向かつていると、この世以外の世界のこともまでもいろいろと思われる。亡くなつた衛門督えもんのかみはどんな場合にも思い出される人だが、ことに何の芸術にも造詣ぞうけいが深かつた

から、こうした会合にあの人を欠くのはものものにおいがこの世になくなつた気がしますね」

とお言いになつた院は、御自身の音楽からも愁^{うれ}いが催されるふうで涙をこぼしておいでになるのである。御簾^{みす}の中で女三^{によさん}の宮^{みや}が今の言葉に耳をおとめになつたであらうかと片^{かた}心^{こころ}にはお思いになりながらもそうであつた。こんな音楽の遊びをする夜などに最も多くだれからも忍ばれる衛門督であつた。帝も御遊^{ぎょゆう}のたびに故人を恋しく思召されるのであつた。

「今夜は鈴虫の宴で明かそう」

こう六条院は言つておいでになつた。杯が二回ほどめぐつた時に、冷泉^{れいぜい}院から御使^{みつか}いが来た。宮中の御遊がないことになつた

のを残念がつて、左大弁、式部しきぶのたゆう大輔その他の人々が院へ伺候したのであつて、左大將などは六条院に侍しているとお聞きになつた院からの御消息には、

雲の上をかけはなれたる住家すみかにも物忘れせぬ秋の夜の月

「おなじくは」（あたら夜の月と花とを同じくは心知られん人に見せばや）

とあつた。

「自分はたいそうにせずともよい身分でいて、閑散な御境遇きげんでいらつしやる院の御機嫌きげんを伺いに上がることをあまりしない私の怠

情を、お忍びのあまりになつてくだすったお手紙だからおそれおい」

と六条院はお言いになつて、にわかなことではあるが冷泉院へ参られることになった。

月影は同じ雲井に見えながらわが宿からの秋ぞ変はれる

このお歌は文学的の価値はともかくも、冷泉院の御在位当時と今日とを思い比べになつて、寂しくお思いになる六条院の御実感と見えた。御使いは杯を賜わり、御纏頭てんとうをいただいた。

参っていた人々の車を出て行く順序どおりに直したり、そちら

こちらの前駆を勤める人たちが門内を右往左往するのとで、静かであつた音楽の夜も乱れてしまつた。六条院のお車に兵部卿の宮も御同乗になつた。左大将、左衛門督さえもんのかみ、藤参議とうさんぎなどという人たちも皆お供をして出た。皆軽い直衣姿であつたのが下のうし襲したがさねを加えて院参をするのであつた。月がやや高くなつて美しくふけた夜に、若い殿上人などに、わざとらしくなく笛をお吹かせになつて、微行の御外出をされるのである。威儀の必要な時には正しく備うべきを備えて御往復になるのであるが、今夜は昔の源氏の大臣のお気持ちで突然にお訪ねたずになつたのであるから、冷泉院は非常に喜びになつた。御美貌びぼうの整いきつた冷泉院と、六条院はいよいよ別のものとはお見えにならなかつた。まだ盛りの御年齢

で御自発的に御位^{みくらい}をお退^のきになった君に六条院は悲しみを覚えておいでになった。この夜でできた詩歌は皆非常におもしろかったが、片端だけを例の至らぬ筆者が写しておくのもやましい気がしてすべてを省くことにした。明け方にそれらの作が講ぜられて、人々は早朝に院から退出した。

六条院は中宮のお住居^{すまい}のほうへおいでになってしばらくお話しになった。

「ただ今はこうして御閑散なのですから、始終お伺いして、何となくということもありますが年のいくのとさかさまにますます濃くなる昔の思い出についてお話し、承りもしたいのを果たすことがなかなか困難です。出家をしたのでもなし、俗人でもないような

身の上で、行動の窮屈な点があります。どちらにも私よりあとに志を起こして先へ進まれる求道者が多いのですから心細くて、思いきつて田舎いなかの寺へはいることにしようかともいよいよ近ごろは思われるのですが、あとの家族たちに関心をお持ちくださるようには以前からお頼みしていることですが、その時になりましたら憐あわれみをお垂たれになつてください」

などと六条院はまじめな御様子でお語りになった。今も若々しくおおような調子で、中宮は、

「宮中住まいをしておりましたころよりも、お目にかかります機会がだんだん少なくなつてまいりますことも、予期せぬことでございましたから寂しゅうございましたね。皆様が御出家をあそば

すこの世というものから私も離れてしまいたい望みを持っており
ますことにつきましても、御相談が申し上げたくてそしてそれが
できないのでございますわ。昔からどんなことにもお力になって
いただきつけて、独立心がなくなっているのをございましょうね。
御意見を伺わないでは何もできません私は」

と言つておいでになつた。

「そうですね。宮中にいらつしやるころは年に幾度かの御実家帰
りを楽しんでお待ち受けすることができたのですがね。ただ今で
は形式どおりのお暇をお取りになつて御実家住まいをなさること
のおできにならなくなりましたのもごもつともです。もうお上と
お后きさきと申すより一家の御夫婦のようなものですからね。ただ今の

お話ですが、さして厭^{えんせい}世的になる理由のない人が断然この世の中を捨てることは至難なことでしょう。われわれでさえやはりよいよといえ^{ほだし}ば絆になることが多いのですからね。人真^ま似^ねの御道心はかえつて誤解を招くことになりますから、断じてそれはいけません」

と院がおとめになるのを、宮は深く自分の心が汲^くんでもらえな
いからであろうと恨めしく思召した。母君の御息所^{みやすどころ}の霊が宇宙
にさまよつて、どんな苦しみを経験しておいでになることかとは
中宮の夢寐^{むび}にもお忘れになれないことで、今も人に故人を憎^{ぞうお}悪さ
せるばかりである名のりを物怪^{もののけ}が出でするということも六条院
はあくまでも秘密にしておいでになったが、自然に人が噂^{うわさ}をして

お耳にはいつてからは、非常に母君を悲しく思召して、人生そのものまでがいとわしくおなりになって、仮にもせよ御息所の物怪が言つたという言葉を六条院からお聞きになりたいのであるが、正面から言うことはおできにならないで、

「お母様の靈魂が罪の深いふうに苦しんでおいでになりますことを私はほかから話に聞きました、それは確かでなくとも想像いたされることなのでございましたが、ただお死に別れましたことだけを悲しんでおりまして、後世のことまでも幼稚な心の私は考へませんでしたのが悪いことでございました。気がついてみますと、宗教のほうの人にくわしい説明もしていただきたくなりまして、私の力で及ぶだけの罪の炎をお消ししてお救いもしたいと

いう望みも起こつてまいったのでございます」

などとかすめたふうにしてお語りになるのであつた。そういう御決心のできるのもごもつともであると哀れに院はお思いになつて、

「炎ののがれたいのを知りながら、愛欲の念をだれも捨てることのできないものなのです。目蓮もくれんが仏に近いほどの高僧になつていたために、すぐに母を地獄から救い出すこともできたのでしようが、その真似まねはおできにならないで、しかも御自身のはなやかな人間としての生活をしいて断ち切つておしまいになることも、知らず知らず煩悩ぼんのうを作る結果になるではありませんか。急がずにその道を御研究になることになさいまして、そのほかの方法で

故人の 妄もうしゆう 執しゆう を晴らさせておあげになることをなさるべきです。

私自身もそれを十分にして差し上げたい心を持つておりながら、ほかのことが多いものですから、そのうち私が本意を達する日が来れば、静かに私自身の手で冥めい福ふくをお祈りしようと予定しているのですが、これも中途半端はんぱな心でしょうね」

などとお言いになって、人生のはかなさ、いとわしさをお語り合いになっているのであるが、まだどちらも出家するには御縁が遠いような盛りのお姿と見えた。

昨夜は微行の御参院であつたが、今朝けさはもう表だつて準太上天皇の儀式をお用いになるほかはなくて、院に参つていた高官たちは皆供奉くぶをして六条院をお送り申すのであつた。

院は東宮の御母君の女御によごが御教育のかいに見える幸福な女性になつてゐることも、だれよりもすぐれた左大将の存在もうれしく思つておいでになるのであるが、その二人にお持ちになる愛は冷泉院をお思ひになる愛の片端にもあたひ価しないのである。冷泉院も常に恋しく思召しながらたやすく御会合のおできにならないことを物足らぬことに思召してただ今の御境遇を早くお選びにもなつたのである。中宮は御実家へお帰りになることが以前よりもむずかしくおなりになつて、普通の家の夫婦のようにいつもごいっしょにお暮らしになり、お催し事などは昔よりはなやかなふうにあそばされて、どの点から申しても御幸福なのであるが、母君の御みやす息所どころのこのために専心信仰の道へ進みたいと願ひもあそばさ

れるのであったが、だれも御同意にならぬことであつたから、せめて功德を作ることで亡^なき靈を弔いたいというお考えになつて、以前にもまして善根をつもうと精進あそばされた。六条院も中宮のお志をお助けになつて、法華^{ほけきょう}經の八講を近日行なわせられる
そうである。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kumi

2003年9月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

鈴虫

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>